おじさんズ通信

２０２２年７月号（Ｎｏ２０）
発行元：登別市新生町４丁目緑風舎
発行者：おじさんズ３号
Web
http:www.ne.jp/asahi/takanet/mori/

おかげさまで本通信も、今回で２０号の節目を迎えました。次なる到達目標は未定ですが、「えい、ままよ。命ある限り」ということで前進あるのみ。今後もご愛読よろしくお願いいたします。

ざっき帳の１

「くまこいて」　語源は？

「くまこいて」なる言葉を耳にしたのは、高校時代でした。クラスの何人かが、悪事やいたずらがばれて、「くまこいて逃げたさ」と、必死に逃走したことを自慢げに話していました。

必死に何かを行うことを表現する言葉だと解釈してはいましたが、最近になって「はて？　くま、とはあの熊のことかな」とか、「『こいて』は、（藪などを）『漕いで』と濁るのが正しいのでは」などと気になりはじめました。

もちろん、本通信の読者、岡山のＮ君や横浜のＩさんにはチンプンカンプンの北海道弁。謎を解くべく、ネットで調べたり、図書館で本を借りてきたり、迷宮に足を踏み入れました。

残念ながら「くまこいて」を取り上げた解説本はありませんでしたが、「笑説　これが北海道弁だべさ」（西本伸顕著）で「いいふり、こくな」「びっくら、こいた」などの「こく」は「～する」の揶揄的表現とか。

これも北海道弁だべさ

さて、「くま」の方ですが、ネットで調べてもその正体は不明です。ただ、通信の読者である登別、室蘭在住の何人かにメールで尋ねたところ、全員が「過去に聞いた」と答え、中には同年配の男性が子どもの頃に耳にしたとの回答がありました。

これはもう、正しい北海道弁の一項目に加えるべきでしょう。「くま」の正体はさておき。

最後に「これが北海道弁～」の中の、笑説の一部を紹介して幕にします。

・北海道弁で読む古典名作選　対訳その２　「枕草子」

春は明け方が、いんでないかい。だんだん白くなっていく山と空の境がちょびっと明るくなって、ラベンダー色した雲が細くたなびいているのが、いいんだわ。

夏はやっぱし夜だべさ

満月のころは、なおなおいんでないかい

～以下略～

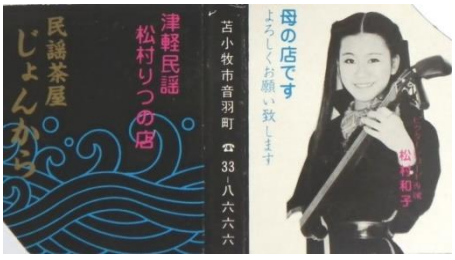
冠に「神をもおそれぬこの暴挙！」と付せられた対訳集には他に「雪国」「吾輩は猫である」などがあり、大いに笑えます。「はんかくさいんでないかい」などと言わず、一度読んだら、いんでないかい？。

ざっき帳の２

名曲？「帰ってこいよ」

十年ほど前におじさんズ２号殿からマッチのラベル数千枚を託され、１、２年かけて市町村別に取捨選択整理し６冊のクリアファイルに収めました。その中の１枚が４０年余り前、青森のご当地ソング「帰ってこいよ」でデビューした松村和子が写っているラベル。

津軽三味線を手に「母の店です。よろしくお願い致します」とPRするのは、苫小牧市音羽町にあった「民謡茶屋じょんから」。ラベルから母親の松村りつさんは、津軽民謡の名人でもあったよう。



なぜこの歌に心が引かれたのか。実はテレビ番組で、息子や娘、あるいは同県人を故郷に呼び戻すシーンのバックに、今もこの曲が流されること多々で（これを選んだ番組関係者は、間違いなくオジンだな）と勝手に想像します。

４０年たっても色あせないこの曲、タイトルがずばり郷愁を呼び起こします。私的には「不朽の名曲」と思うのですが、ヤブにらみかな？

ざっき帳の3

札幌映像機材博物館

山本 BIN 氏がこの春、登別から札幌に移設した映像機材博物館を見てこようと６月末、札幌へ出向きました。リニューアルした入館記念しおりセットを携えて。

博物館の新天地は明治の北海道開拓時代から幌別と縁のある白石地区。JR 白石駅から徒歩３分と踏んでいたのですが、結局、２０分は歩きました。

平和通に近い建物１階は元カメラ屋さん。いろいろな引き合いを断ってきたが、彼のミュージアムなら店主だった故人の遺志にも沿うということで借りられたそう。しかし、家賃も札幌バージョンでした。

道都移転は正解だったようです。

最大のトピックスは、博物館運営に何かと知恵を授ける「人財」が結構いること。その最たるものが、「博物館運営に支援の手を」と呼びかけたクラウド・ファンディング（crowd＝大衆：funding＝資金調達）で、掲げた調達目標は１００万円。ただ、期限内に達成しなければ、集まった金はすべて寄付者に戻すというから、下手すると悪夢をみることになりそうです。

そして、女神は微笑んだ

で、結果は……**締切１日前に目標達成！**

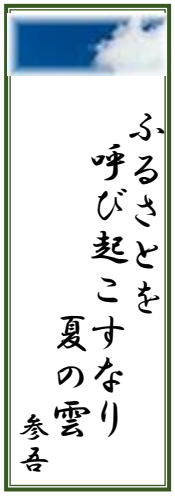
クールな館主が心の中でひそかに「万歳！」を叫んだか、否か、定かではありません。ただ、ここから差し引かれてサイト運営者に渡る１５％の手数料に、名残惜しやの手を振る哀切に満ちた心情、お察し申し上げるばかりです。

ともあれ、ホッとするのは愚直にかたくなに守る「入館無料」の私設博物館運営に、資金面で数年先までのメドがついた事です。

あとは、これぞと惚れ込む若き後継者を掘り当てることでしょう。なにしろ、人口１６０万人都市です。志を同じくする輝く原石、いるはずです。

ざっき帳の4

ひと月に 一句の苦吟 それもよし



モタモタしていたら、夏があっという間に通り過ぎて行きそうな、ぱっとしない天気が続いています。そこで、２０２２夏空を記憶に残す一句をしたためました。

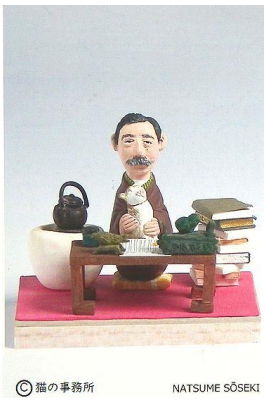
実は毎月１回「木曜会」なる集まりがあります。顔ぶれはおじさん、おじいさん数人と俳句の宗匠ともいうべき年配のご婦人。近況や四方山話の前に、それぞれ持ち寄った一句を提出し後日、宗匠より批評、添削を願うという趣向です。

このほど、私が出した一句、まだ手直しのお手本が届いておりませんが、多分あちらこちら、切られ与三郎になっての帰還になるでしょう。

季語を踏まえての五・七・五、本当に難しい～

ざっき帳の5

カミさんが定期購読している「猫の事務所通信」（小樽市）に、ちょっとした事情から数か月分の「おじさんズ通信」を送ったところ、代表の髙橋明子さんからお礼の写真入りはがきが届きました。



裏面に猫を抱いて端座なされるのは文豪・漱石先生で、作者は登別市立図書館にも以前講演で訪れた人形作家、高山美香さん。先月号でイギリスの画家、ターナーと「坊ちゃん」「草枕」の関係を書き記したからでしょうか。

「猫の事務所通信」では、その高山さんが「今日もシネマ日和」と題して、映画の名作を漫画で紹介しており、これが結構面白い。興味がおありの方は「猫の事務所小樽」でネット検索されては。

薫風 烈風

▶「コサック」の元の意味は「自由な人」とか「向こう見ず」というチュルク語からきているとか。ならば「フランス」「ロシア」「アメリカ」の語源は？

七十代半ばにして、知らないこと山ほどあり。というわけで、図書館からミハイル・ショーロホフの「静かなドン」全３巻を借りてきて読書中です。延長貸出は何回になるか。では皆さん、お元気で～。